

昭和
軍閥

激動篇

昭和軍閥／激動篇／立野信之





昭和軍閥 激動篇

昭和38年8月10日 第2刷発行 ¥290

著 者 たて の のぶ ゆき
立 野 信 之

東京都文京区音羽町3-19

発 行 所 野 間 省 一

東京都板橋区志村町5

印 刷 所 凸版印刷株式会社

(製本 大成株式会社)

発行所 東京都文京区 株式会社 講 談 社
音羽町3-19

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

© Nobuyuki Tateno 1963

目

次

第一章	何が起るかわからない	七
第二章	公判闘争	二一
第三章	相沢を見殺しにするな	三六
第四章	謀略	四七
第五章	もう打つ手はないのか	六四
第六章	その前夜	八二
第七章	雪の朝	九三
第八章	叛徒の処置	一一六

第九章 奉勅命令

一四二

第十章 軍旗に手向うな

一六〇

第十一章 肅 軍

一七九

第十二章 華北工作

一九七

第十三章 悴はまだ生きていた

二一二

第十四章 運命の六郷川畔

二二六

第十五章 蘆溝橋事件

二四一

装幀・レイアウト 大森忠行

昭和軍閥

激動篇

第一章 何が起こるかわからない

一

相沢事件は、陸軍の内外に大きな衝動をあたえ、怪文書がまたぞろ乱れ飛んだ。

皇道派の連中から出た怪文書の一つ――

陸海軍青年將校ニ機ス

永田事件以来、頻々トシテ吾人ノ耳朶ヲウツモノハ「遁ゲ出シタ人ガアツタソウデスネ」「憲兵隊長ハ腰ヲ抜カシタツイウデハナイカ」「軍人モ近頃ハアマリ町人ト違ワナイ」等々ノ不快ナル嘲笑ナリ。永田伏誅ノ真相」ナル一文ヲ接手シテ、軍人腰抜ケ論抬頭ノ由來ヲ知り、痛嘆慷慨禁ズル能ワズ、タマタマ千葉市内〇〇〇ニ相会セル有志十七名、徹宵悲憤痛論自戒自奮ヲ誓イタリトイエドモ、皇國皇軍ノタメ尚意ヲ安ンズル能ワズ。僭越ヲカエリミズ、アエテ陸海軍青年將校

諸賢ニ機シテ憂憤ヲモラシ、奮起ヲ冀望ス。

この機文に「永田伏誅ノ真相」なる図面入りの説明――その内容には事実と相違した部分がある――を添えたのちに、

一、士氣振起ヲ要ス

桜田門外落花ノアシタ、井伊ハ憂々ノ劍戟ノ中、與中ニトドマリテ自若タリシニアラズヤ。大久保甲東（利通）ハ刺客島田一郎ニ左腕ヲ斬リ落サルルヤ、大喝一声シテ、島田ヲ辟易遂巡セシメ、犬養首相ハ拳銃ヲ擬セル闖入者ヲ制止シテ対談セルニアラズヤ。

然ルニ何事ゾ、永田ノ醜狀陋態女子走卒ニモ劣レルハ？ 然モ兇徒奉行ニ迫ルヤ、与力ハ遁走シ、目明シハ腰ヲ抜カス態ノ銀幕、舞台ノ悲喜劇ソノママナル山田、新見ノ醜ハ、ホトンド聞クニ堪エザルモノアリ。嗚呼、昌平久シクシテ、士風ノ頹廢弛緩ココニ至レルカ。

而シテ何ンノ奇怪事ゾヤ。鯉口三寸ヲ寛ゲ得ザリシ儒夫ニ、叙位叙勲ハ奏薦セラレ、アルイハ自決退官ノ引責ヲ厚顔免カレントシテ「体力及バズ」ト弁明コレ

努メ、マタ「事件當時在室セズ」トノ事實歪曲隱蔽ヘト百方奔走シツツアリ。コノ二重ノ皇軍威信ノ失墜事ヲ坐視放任シテ縱斷的、横斷的連繫ヲ禁ジ、怪文書ヲ嚴重取締ル等ヲモツテ、按本塞源ノ肅軍ヲ庶幾シ得ルヤ

諸賢ヨ。吾人ハ利己主義ノ權化ナル青飄軍式中部幕僚トソノ二、三ニ操縱驅使セラルル張子將軍トニヨツテ、軍ノ統一、士氣ノ振作ヲ期待シ得ベカラズ。相沢中佐ノ神の一挙ハ、正ニコレ昭和武士ノ開闢ナリ。吾人青年將校ハヨロシクコノ氣風ヲ學ビ、昭和ノ薩長土肥の下級青年武士トシテ、旗本八万騎ノ浮薄輕佻ヲ猛擊一蹴シ、武士道精神ノ昂揚ニ努力スルヲ要ス。

陸海軍当局ハサキニ盲旅行ト稱シテ、水郷潮米ニ新聞記者ヲ伴イテ——當時新聞班ハ記者一人アタリ五百円準備携行シ、ウチ四百円ハ金一封トシテ贈与セリトイウ——真崎、荒木ヲノ純正將軍ニ統制攪乱者ノ惡名ヲモツテ筆誅ヲ加エシムルニ成功シ、今ヤ草刈海軍少佐ヲ狂死トシテ葬リ去リタル故智ニ學ンデ、相沢中佐ヲ巷説妄信ノ徒トシテ抹殺セントシツツアリ。当局——恐ラクハ數名ナシ數十名ノ幕僚群——ノ迷妄救ウベカザルハ、モトヨリ多言ヲ要セザルベシ。

相沢中佐ノ超風の行動ニ驚駭シテ、狂ト呼び、愚ト目スル者ハ、中佐カ劍神一如ノ修練ヲソノ純一無雜ノ天性ニ加エテ神人一体ノ高キ精神ニアルヲ理解シアタワザル自己ノ蒙昧愚劣ニミズカラ恥ズベシ。

相沢中佐ノ一挙ハ、実ニ天命ヲ体シ、神意ニ即シテ昭和維新ノ烽火ヲ拳ゲシモノ。コレヲ部内派閥鬭爭ノ刃傷の結末ト見ルハ無明痴鈍、アタカモ現下部内ノ諸動向ヲモツテ往年軍閥時代ノ藩閥の相削視スルト同一轍ノ愚ナリ。

今ヤ維新変革ノ前夜トシテ、国家ノ上下ハ維新カ非維新カニヨツテ明カニ二分セラレタリ。コノ二潮流ノ最尖端ニ立ツテ、接戦火ヲ吐クモノ、実ニ陸軍部内ノ維新派ト非維新派ノ対立ナリトス。カクテ七月十五日、突如重臣ブロック、軍閥者流、新官僚群ヲ背景トシ、ソノ先棒タル林、永田ノ徒ハ統帥權干犯、違勅敢行ノ逆謀、七・一五反動クーデターヲ敢行セリ。天コノ不義ヲ寬過セス。相沢中佐ニ藉スニ神劍ヲモツテシ、電閃一撃、永田ヲ兇死セシメシモノ、部内私闘ニ非ズ、維新ノ故ナリ。

維新ノ烽火拳ル！ 諸賢ヨ、カク正視諦觀シテ、アヤマルナカレ。

天皇機関説的思想、行藏ヲモツテ、皇威ヲ凌犯シ、万民ヲ残賊スルコト、ココニ年アリ。国運民命マサニ窮マラントシテ、神劍一閃、維新ノ烽火挙ル。永田ノ劉血ヲ祭庭ニソソイデ、天神地祇ノ降臨照覧ノモト、民蹶起ノトキハイタル。烽火一閃、嗚呼待望ノ機ハ来レリ。ツツシミテ憂国慨世ノ義魂ニ訴エ、奮起ヲ望ムモノナリ。

昭和十年八月二十一日

暁天ヲ拝シテ黙禱

在千葉陸軍青年將校有志
在館山海軍青年將校有志

檄文の記名が「在千葉青年將校有志」「在館山海軍青年將校有志」となっているが、その実、これも前の怪文書と同じく村中、磯部の所業になるものだった。

この怪文書で暴露されているように、兇行当日の陸軍省幕僚群の狼狽と無能ぶりは、眼に余るものがあった。

軍務局長室は、陸軍省の裏門から入って、二棟目の右端にあった。そこへ行くには途中に課員たちのいる大部屋と、小部屋二つ、それに局長室に直接出入りのできる軍事課長室がある。局長室にはそれらの部屋に関係なく

廊下から出入りできる。相沢はその扉口から闖入したのである。それだから局長室に何か変事がおければ、打てば響くように一連の部屋々にわかる筈である。ところが課長をはじめ課員たちは、ただ茫然として、なすところを知らなかった。

陸軍省からの通報で、犯人逮捕のために麹町憲兵分隊から森少佐や私服の下士官たちが乗り込んでみると、軍事課の將校たちがそちこちに一団となってコソコソ話し合っているばかりで、

「犯人はどこか」

とたずねても、誰一人満足に答える者がなかった、という。

当時の陸軍省幕僚群の無能と狼狽ぶりが眼に見えるようである。

——相沢事件当日、私は自動車飛ばして陸軍省に行った。大変な騒ぎだった。省前は自動車一杯、軍人があわただしく右往左往している。惨劇のあったことを物語るらしい様子だ。このとき私はよくよく軍人の挙動を見ることができた。軍人のことごとくが平素のいばり散らすふうを、どこかへ飛ばしてしまっている。

た。これが名にしおう日本の陸軍省か。これが皇軍中央部将校か。今直ちに省内に二、三人の同志将校が突入したら、陸軍省は完全に占領できるがな、情ない中央部だ。幕僚のさきは見えた。これでは軍閥の終焉だ。今にして上下維新されずんば、国家の前途いかん、という感慨を起こすとともに、ようし、俺が軍閥を倒してやる。既成軍部は軍閥だ。俺が倒してやるという決意に燃えた。

これは二・二六事件の首謀者磯部浅一の「獄中手記」の一節である。陸軍省の狼狽ぶりを眼のあたりにして「ようし、俺が軍閥を倒してやる」と飛躍的に決意した磯部の心情が眼に見えるようである。

とにかく上を下への大騒動であった。

林陸相は兇行の報をきくと、がく然色をうしない、

「すべて、このわたしが悪かった!」

と、嘆息を洩らした、という。

これまた自信のない、気の小さな林陸相の姿が眼に見えるようである。

それでもその日の午前十時半、林陸相は官邸に橋本次官、今井人事局長、大山法務局長らを集めて、善後策を

協議した。午後一時には、渡辺教育総監が陸相官邸をおとずれて、今後の部内統制について鳩首協議した。

翌八月十三日、林陸相は葉山に天皇を訪問し、軍務局長遭難事件についての委細を奏上した。

また警視庁では、その日午前十一時、小栗警視総監は安部特高、本間警務、矢野官房主事らの各部長を総監室に召集し、管下各警察署に対して、とくにこの際思想団体の動向を厳重に監視することを命じ、同時に万一に備えて待機命令を下した。

「——陸軍大臣は引責辞職せよ!」

そんな声が高まった。

林陸相はその中で事態の收拾と事件の後始末に骨折った。殺された永田の補充として軍務局長には人事局長今井清中将を、人事局長のあと釜には参謀本部第三部長後宮淳少将を据えた。

その間にも、まだ何が起こるか知れない、という心配があった。デマが飛び、皇道派の怪文書が横行した。

情報によると、信州から東北にかけては殺された永田中将に対する同情がつよく、九州、佐賀方面は相沢——というよりは教育総監を追われた真崎大將に対する同情がつよく、相沢事件、即教育総監罷免事件をめぐって陸

軍部内が地方的に二分されて対立するような空気をかもし出しているとのことだった。

「——真崎一派は、これを機会に林陸相追ひ出しの報復手段に出るのではないか」

そんな噂も立った。

それに在郷軍人会を背景にして、さきごろから「天皇機関説問題」でいきり立っている国家主義者たちが政友会の一部と組んで、陸相の責任問題とあわせて、倒閣運動にまで持って行こうとしている気配もまた濃厚であった。

二

そうした不穏な空気の中で、八月二十六日、危ぶまれた師団長会議が開かれた。相沢事件に対処し、軍紀を刷新するための会議だった。

片腕の永田を失って意気沮喪した林陸相は、それでも軍部に關して、次のような訓示を行なった。

「——時局重大、内外多事にして、拳軍団結の強化と軍規の振作いよいよ切望するとき、突如国軍の内部において前代未聞の不祥事を惹起し、かしこくも宸襟を悩まし奉りたるは、まことに恐懼おく能わざるところ

にして、その動機のいかんにかかわらず、光輝ある皇軍の歴史にかんがみ、まことに痛恨の至りに堪えない。これもとより本職の不徳の致すところ、その責任の重大なるを感ずる次第である。

(中略)

そもそも軍の生命とするところは、つねに一貫せる統帥の脈絡にもとづく鞏固なる団結にあり、これをもって国軍の根幹たる将校は、よく建軍の本義に透徹し、つねに天皇親率の軍隊たる全体觀に立脚し、一将一兵だもつねにその進止は大御心による統帥の発露なる所以を明識し、挙措ことごとく一貫せる統帥の系統に則らなければならぬ。将校はその言動を慎重にし、部外との接触にあたりては、軍の威信を確保するとともに、特に軍機の秘密にわたる事項を厳守するを要す。また流言蜚語に対しては、活眼をもつてこれが是非曲直を判別し、全軍声価のため相率いてその流布を取締ることが必要である。将校団長たり部属の長たる者は、下をいつくしむの愛と熱とをもって部下の指導に全幅の努力をほらい、じゅんじゅん説示して訓化これつとむるを要す。

然れども、改悛の情認むべき場合には、各団長

は断乎たる措置をもつてこれにのぞまざるべからず。また部下はつねに上を敬うの念に燃え、進んでその訓化に浴するに努め、たとえ自己の所信を披瀝する場合においても、これがため軍紀をみだるがごときことなきを要する（後略）」

この訓示は一応条理をつくしているように見えるが、肅軍の本当の熱意はどこにもない、形骸だけのものだった。

だから皇道派の青年将校らは、陸相のそんな訓示など屁とも思わず、よりより集合しては昭和維新のクーデターについて協議を重ねていた。

磯部浅一は、当時の空気を、その「遺書」の中で次のように伝えている。

「——陸軍の上下も、国家の内外も、われら同志の間も、実に騒然として、天下の事、いよいよ多事ならんとする気配だ。栗原安秀、明石寛二両君らは、若い将校とひそかに何事かを語っているようだ。地方の青年将校からも激烈な通信がある。羅南の長尾少尉は連隊をぬけ出して上京し、田中勝君と連絡しているらし

い。菅波大尉上京せりとの風説は起こったが、大尉の所在は杳として不明、天下はあげてわれら同志将校に気をもんでいる……あの老骨の相沢さんが、ひとり決然として、皇軍私兵化の元兇をたたききつたのに、われわれ青年将校はなんとしたことだ。われわれこそ、これがための挺身隊ではなかったのか。このさい、われわれは猛省一番しなくてはならない」

林陸相は、師団長会議がすんでから一週間後に、首相官邸に岡田首相を訪れた。

「もう自分には陸軍大臣はとも続きません」

林はのっけから弱音を吐いた。

「このまま天皇機関説問題をうっちゃっておいたら、また何が起こるかわからない。現に若い将校が十人ぐらい団結して、何か企らんでおるといふ情報も入ってます。それで天皇機関説について、政府はもう少し何とか処置はとれないものでしょうか」

つまり政友会と在郷軍人団体とが提携して騒ぎたてている天皇機関説問題が、相沢事件のために陸相の責任問題とからみあって、いまや倒閣運動にまで及んできたので、政府が機関説問題に適当な手をうってくれないと、

陸相の立場が非常に困難になる、と訴えたわけである。

林陸相の弱音をきいた岡田首相は、機関説問題では陸軍ほど騒いではない海軍を背景にしているだけに、まだいくらか強気であった。

「これまで、やるだけのことはやっているんで、それ以上のは何もできない。自分は、天皇機関説問題では絶対に動かないつもりです」

と、はねつけた。

林陸相は一層窮した恰好になったが、しかしそれはすでに覚悟の前だった。

「今日、自分のうつべき手は、ただ一つ残っているが、それは自分が陸軍大臣をやめることです」

林は辞意を表明した。

「自分も経験があるが、大臣で居てこそ何でもできるが、やめて軍事参議官になったら、やろうと思ってもなかなかできないから……」

岡田はそういつて翻意をうながした。

だが、林はあくまで辞職を主張した。

「わたしのあと釜には、川島大将を推します……実は川島には、内々で代ってくれるように話したところ、川島は、もう時すでに遅い、この上、何が起るかかわからん、

とはいつてましたが、しかし極力川島を説いてみます。明日中には何とか返事があると思うから、ぜひそう願いたい」

翌日、林は言葉通り、午前中に岡田首相を訪問した。

「川島大将は、結局承諾しました……午後一時半頃、川島大将をよこしますから、どうか会っていただきたい」川島義之の大将は愛媛県出身。林陸相よりは三期下で、かつて人事局長として公正な点を買われ、師団長、教育總監本部長、朝鮮軍司令官を経て大将に進み、昭和九年八月の異動で軍事参議官になっていた。比較的、派閥色の薄い人柄で、それだけに林陸相の後任には適当な人物と思われた。しかしその一面、荒木大将と仲がよくないという噂もあり、そんなところから陸軍がまた川島を出すのに、機関説とか何とか難題を持ち出して、陸相後任難におちいらせ、結局政府を窮地に追いこむのではないかと、それが岡田首相の頭にひっかかった。

しかし林が言うには、

「数日前、荒木と会ったが、その時荒木は陸軍では相沢事件のようなことが起これば、伝統的に大臣が責任をとる、ということになっているのだから、とにかくあなたはこの際大臣をやめて、新たな人にやらせ、自分と一緒

に軍事参議官として新大臣を援けてやろうじゃないか、としきりに言っていました」

どうやら新大臣に川島を持って来ることには、荒木は不賛成ではない、とのことだった。

三

九月五日、川島陸相の親任式が無事に取り行なわれた。

林がやめたので、橋本陸軍次官も一緒にやめて近衛師団長に納まった。

次官の後任には第十一師団長の古莊幹郎中将が坐り、古莊のあとには憲兵司令官の田代皖一郎中将が赴任した。そして田代のあとには関東軍参謀長の岩佐祿郎中将が転補となり、その岩佐の後釜に転補されたのが、第十二師団付として待命の一步手前にあった東条英機少将であった。

東条は、盟友永田鉄山が非業の死をもって関東軍に押出してやったようなものだった。

陸相の交替は、しかし岡田内閣にとっては、さしたる補強策にもならなかった。自分の内閣もはや余命いくばくもないと感じた岡田首相は、川島新陸相の親任式が

すむとすぐ、原田熊雄を通じて西園寺老公に、あらかじめ辞任についての申し入れをした。

「自分も、これからさき、粘ることはできるだけねばりますが、どうかあとをよく考えておいていただきたい。後継首班として宇垣とか南とかいいう説があるが、自分はそれについてよく考えてみたが、今日となつては、宇垣も南も、どうもとうてい駄目だろうと思います。結局、湯浅宮内大臣か、斎藤実子爵がいんじゃないかと思われます」

原田は、それをさつそく興津の老公に伝えた。すると老公は首をひねっていった。

「どうも、きていると、総理の話もすべてロジックに合わない、筋が通らないけれども、やむを得まい。まあ、総理には『御苦労であつたし、よくやった』といつて、西園寺もたいへん喜んでゐた、といつておくれ」

それから後継首班については、

「どうも湯浅は、いざという時に固くなりませんかと思ふ。やはり何といつても、斎藤のほうが年は取つておつても、政治の全体がわかるし、度胸もあるし、やっぱり斎藤がいいんじゃないかと思ふ」

斎藤実子爵は海軍の長老で、先年、五・一五事件で犬